

なくしたボタン

ガマくとカエルくんは、お散歩に行きました。二人は広い草原を横切って歩きました。森の中も歩きました。川沿いもあるきました。そして最後に、ガマくんの家に帰ってきました。

「おや おや」とガマくんは言いました。
「足が痛いよ。それに、上着のボタンも一つなくなってる」
「心配しないで」とカエルくんは言いました。
「さっき歩いたところを全部まわって、なくしたボタンをさがそうよ」

二人は広い草原に戻って、高くしげった草の中でボタンを探し始めました。
「ここに君のボタンがあるよ」とカエルくんがさげびました。
「それはぼくのボタンではないよ」とガマくんは言いました。
「そのボタンは黒いね。僕のボタンは白いよ！」ガマくんはそのボタンを上着のポケットに入れました。

カエルくんはすぐにまた別のボタンを見つけました。でもガマ君は言いました
「そのボタンには穴が二つあるね。ぼくのボタンの穴は四つだよ」ガマ君は上着のポケットに二つ穴のボタンを入れました。

二人は森へ戻り、くらい小道を見ました。たくさんボタンを見つけ、そのたびにカエルくんは嬉しそうに叫びました。
「ここに君のボタンがあるよ、ガマくん！」
二人は小さいボタン、正方形のボタン、うすっぺらのボタンを見つけました。でも、どれもガマ君のボタンではありませんでした。

ガマ君はそれらのボタンを全部上着のポケットに入れました。ガマくんは飛び跳ねて、叫びました。「世界中がボタンだらけだけど、どれもぼくのボタンとは違うよ！」そして、ガマ君は走って家に帰り、ぴしゃりと扉を閉めました。するとその床の上に、ガマ君は白くて、四つ穴が開いていて、大きくて、丸くて、厚みのあるボタンを見つけました。

「わあ！」ガマ君は言いました。「ずっとここにあったんだね。かわいそうに、カエルくんにたくさん迷惑をかけてしまった。この埋め合わせをしないと！」そして、ガマ君は上着の中のボタンをすべて取り出しました。ガマ君は棚からさいほう箱を取り出し、彼の上着にそのボタンを全部ぬいつけました。

翌日、ガマ君はカエル君に自分の上着をプレゼントしました。カエル君はそれがとてもきれいだと思いました！ガマ君は新しいボタンをととても上手にぬいつけていて、今日までずっと、そのボタンを一つたりともなくしていません。